

## 近江の君の周辺

田 仲 洋 己\*1)

### An Essay on “Ōmi-no-kimi”

Hiroki TANAKA

#### ABSTRACT

“Ōmi-no-kimi” is an eccentric and laughing character in “The Tale of Genji”. She appears in “Tamakazura-Jūjō” chapter in the middle of “Genji”. Her father “Nai-daijin” who was called “Tō-nō-chūjō” at the beginning of this tale becomes a political rival to “Hikaru-Genji”.

“Ōmi-no-kimi” contrasts strikingly with “Tamakazura” who is the heroine of “Tamakazura-Jūjō” and is adopted as a daughter by “Hikaru-Genji”. “Tamakazura” is elegant, but “Ōmi-no-kimi” is foolish. Her thoughtless speech and behavior embarrasses “Nai-daijin” and his family. She is as ridiculous as “Suetsumuhana” who is a princess of “Hitachi-no-miya” family.

This essay intends to discuss the background of her name “Ōmi-no-kimi” and to consider her function in this tale.

#### I.

『源氏物語』五十四帖のほぼ中間、所謂「玉鬘十帖」に登場する近江の君は、この物語の中では末摘花や源典侍と並ぶ「をこ話」の主役である。「ただいと鄙び、あやしき下人の中に生ひ出で」<sup>1)</sup>(常夏卷) た彼女の、純情ではあるが大家の子女には相応しからぬ羞恥心を欠いた言動は、実父内大臣の一門とその周辺に様々な波紋をもたらして行く。

近江の君が源氏物語中に占める位置と機能については、既に少なからぬ研究が積み重ねられ論じ尽くされてしまったかの感があるが、そこでは屢々父内大臣との関わりが考察の対象とされ、内大臣一家に代表される貴族社会の在り方が問われることが多かった。従来の研究を総括する見解として、以下に針本正行氏の文章を部分的に引用する。

内大臣は近江の君に対する親としての愛情を微塵も有していない。あるのは対社会意識であった。宮廷社会から批判されることを理由に、近江の君を排除しようとしているだけなのである。ここにおいても、光源氏が六条院に女性を集わせ、栄華を確保し

---

\*1) 放送大学助教授 (人間の探究)

ているのに対し、弘徽殿女御のもとへ近江の君を頂ける内大臣の姿勢が問われることにもなる。いわば、近江の君に対する内大臣のありさまには、貴族社会における人間性の欠如が象徴化されているのである。(中略)近江の君がひたむきになればなるほど、笑われる対象となるが、逆にその純粹さを受け入れることができない宮廷社会の問題が物語世界に開頭することになるのである。(中略)「常夏」巻以降、近江の君は内大臣の外腹の娘として玉鬘と対偶的に描かれていることは明らかである。玉鬘の登場は、光源氏と内大臣との政治的溝を深めたり、融和したりする役割を担わされていたが、近江の君の登場は、内大臣の「物きらきらし」い権勢主義をあらわにし、光源氏の絶対性を保証する役割を果たしていたのである。(中略)「少女」巻以降の六条院世界の新たな人間関係を相対化する使命が、貴族社会の矛盾を内在させ、秩序社会から背反する近江の君の存在に与えられていたのである<sup>2)</sup>。

近江の君は、源氏方の玉鬘と対偶を成し、源氏と内大臣との対立関係に組み込まれて、その一端を戯画的に描き出すための材料となる。彼女は「をこ者」として徹底的な嘲弄の対象とされるが、そのことが逆に内大臣家、ひいては貴族社会の在り方を剔抉し、相対化することになる。如上の見解を基本的には継承しつつも、本稿では「近江の君」というその呼称に些かこだわりの形で、源氏物語の内部世界における彼女の定位について若干の検討を加える作業を試みたい。

「近江の君」という彼女の呼称は物語中で屢々明示されるものであって、父内大臣からもそのように呼ばれているが、その由来は必ずしも明確には語られていない。近江の君と近江国との繋がりを示す記事としては、「妙法寺の別当大徳の産屋に侍りける云々」という彼女自身の発言が見えるばかりである。妙法寺とは現在の滋賀県八日市市妙法寺町に位置する延暦寺の別院であり、その住職が産室に招かれている事実は、近江の君の母方が近江国に何らかの縁を有していたであろうことを窺わせる。具体的には、その母が近江に拠った氏族の出であるとか、『全集』の頭注が言及するように<sup>3)</sup>、近江守あたりの娘であった宮仕えに出て内大臣と関係した等の可能性が想定されよう。

「近江」という呼称を持つ女性としては、『蜻蛉日記』に登場して道綱母の嫉妬心をいたく駆り立てる兼家の愛妾の存在がよく知られている。この「近江」は、兼家との間に娘綾子を儲けた大宰大式藤原国章女のことでであろうと推定されているが、彼女は『栄花物語』に拠れば「いと色めかしう、世のたはれ人に言ひ思はれ給へる」有様であったという。また『紫式部集』には次のような歌が見える。

近江守の女懸想ずと聞く人の、「二心なし」など、つねにいひわたりければ、うるさくて

水うみの友呼ぶ千鳥ことならば八十の湊に声絶えなせそ<sup>4)</sup> (紫式部集 29)

「近江守の女懸想ずと聞く人」とは、後に紫式部の夫となった藤原宣孝のことである。近江の君の造型にはこの「近江守の女」の姿が投影され、物語世界の内部においてかつての恋敵に対する報復がなされているという説も存する<sup>5)</sup>。

一方、杉山英昭氏は、かつて高崎正秀氏の説かれた「近江女の物語」<sup>6)</sup>の系譜に近江の君を位置づけ、その読解作業を試みられている<sup>7)</sup>。氏は、近江という地名が包含する掛詞「逢ふ身」の機能を検証した上で、近江の君の出現における父子再会譚としての側面を重

視される。そして、古代の近江国の風土、文化の在り方に着目し、『蜻蛉日記』に出る「近江」なる女性の姿をも視野に入れつつ、近江の君の特異な言動には近江国の帰化人系の文化の像が反映していると結論づけられている。

「あふみ」という歌ことばによって造型されたさまざまな女達に付与された負の諸観念は、逆に考えると、彼女たちの価値基準が根底から一般の価値基準とは異っていたと考えることができる。その価値基準を近江という土地柄で考えた場合、帰化人の文化という点に淵源を見出すのである。(中略)近江なる土地は都に隣接しながら異文化の土地であるとする人々の記憶が、反日常的なもの、反宮廷的なものとして、近江とよばれる女性群像を造型してゆき、さらに「あふ身」のことばの連想が心象を敷衍・増幅して女性群像を造型したとすることができよう<sup>8)</sup>。

周知のように、源氏物語に登場する女性の呼称もしくは巻々の名称には、何らかの象徴的意味合いが籠められている場合が少なくない。杉山氏の論説に多大な刺激を受けつつも、やや異なった角度から「近江の君」という呼称の背後に潜む象徴性を読み取っていく作業を本稿の課題とした。

## II.

「湖国」とも呼ばれる近江はその中心に琵琶湖を抱いた美しい国であるが、かつては近江京、紫香楽宮が置かれた都城の地でもあり、古代・中世の文化の遺構を数多く現代に伝えている。近江朝の成立に伴って渡来人の文化集団が各地に蟠踞し、また貫之に連なる紀氏が密接な地縁を有していた事実はよく知られている<sup>9)</sup>。信長の安土城造営や近江商人の活動が示すように、後世に至るまで政治、軍事、交通、経済における要衝の地であった<sup>10)</sup>。

近江国の魅惑的な風土には、その一方で何ともミステリアスなイメージが纏わりついている。『今昔物語集』巻二十七は本朝世俗部中の「霊鬼」、つまり怪異の出現を語る巻であるが、この中には近江国を主舞台とするものが4話<sup>11)</sup>、山城国に属するが逢坂山を隔てて近江と隣接する山科の地を舞台とするものが2話ほど含まれている<sup>12)</sup>。巻二十七の総話数45に対してこの数字は十分に大きなものであるとは言えないが、「近江国安義橋なる鬼、人を噉ふ語」(第十三話)あるいは「近江国の生霊、京に來たりて人を殺す語」(第二十話)といった標題の存在は、都人の近江に対する眼差しを窺わせる徴表としてなかなか示唆的であるように思われる。また近江を舞台とする4話のうち3話までが、橋における怪異の出現を語る。第十四話と第二十一話は交通の要衝として著名な勢田橋(瀬田橋)を舞台とし、第十三話の舞台である安義橋は東山道が日野川を渡る地点に架けられていたものと推定されている<sup>13)</sup>。

周知のように、此岸と彼岸とを連絡する機能を持つ橋は、坂や峠と並ぶ境界の地である。そこはコチラ側とアチラ側、ウチとソト、共同体と異界とが出会う境であり、異人や変化の者と接触する機会の多い場所である。鬼女の片腕を切り落とした渡辺綱の伝説で知られる一条戻橋や宇治の橋姫説話を嚆矢として、橋に纏わる怪異譚は数多い。そして相当に飛躍した推論ではあるが、『今昔物語集』巻二十七において瞥見される近江国像には、

橋と同様の境の地としての性格が認められるのではあるまいか。換言するならば、王朝人の感性の識閥における近江とは、異界が顕現する境界領域としてのイメージを色濃く付与された存在なのではなかったろうか。

翻ってみれば、大宝令によって定められた古代の七道制において、近江は美濃・飛驒・信濃・上野・下野・陸奥・出羽と連なる東山道に属していた。つまり近江は東山道の西端に位置して山城国＝平安京と直接に接触する国であり、都人にとってはその背後に控える東山道諸国、広く言うならば「東国」の存在をつねに意識せざるをえない空間だったのでなかろうか。現実の地理的条件としても、東国へ向かう東山道、東海道、それに北陸道は近江国内を相当の距離にわたって通過しており、交通の要衝としてまさに京から東国への出入を制する土地であった。そのような性格が最も濃密に凝縮された、つまり平安京が抱える東方への回路を喉元で扼する地点が逢坂山であり瀬田橋である。平安人士にとっての近江とは東国の最前線の謂であり、中心である京都と周縁もしくは異界である東国との接点として理解されていた側面があるのではないだろうか。

古代日本の国土空間において、東方の国々つまり広義の「東国」はどのような位置を占め、どのような機能を担っていたのであろうか<sup>14)</sup>。畿内に拠った政治的、文化的中心——仮に「王権」という語を用いてこれを示しておくが、その畿内王権にとっての東国とは、単に広大な支配領域であると言うにとどまらず、中央の王権を軍事的、経済的に支える後背地として無視できぬ重味を持つ存在であったと思われる。壬申の乱において吉野に潜んだ大海人皇子は東遷、伊賀・伊勢・美濃・尾張四国の勢を味方につけ、不破関以東の軍事力を掌握することによって勝利を得た<sup>15)</sup>。『万葉集』に見られる防人の徴発は、東国が軍事力の供給基地であった事実を示す。支配の実質がいかなるものであったにせよ、鎌倉幕府成立以前の畿内の王権にとって、東国は己れの威令の及ぶべき土地であり、保持、経営されねばならぬ国土として認識されていた。桓武朝における坂上田村麻呂の派遣に代表される蝦夷征討政策の強行は、東国経営の積極策として支配領域の拡大を図ったものであり、逆に東国との絆を絶たれた政権は、近江朝や平氏政権のように脆くも崩壊するしかないわけである。その意味で、天皇の代替りをはじめとする国家の非常時に際して、鈴鹿・不破・逢坂（かつては愛発）の三関に使者を派遣し警備を固めたという固関の制度の存在は象徴的である。壬申の乱の記憶に基づくこの制度は、平安の末には形骸化するに至ったが、皇位の交替に伴う政治危機の勃発に備えて畿内と東国の間を離断し、東国の勢力を利用しての政権篡奪の動きを予防するための措置と解される。畿内の王権にとっての東国の軍事的、政治的比重が、時には王権の存立そのものをも左右しかねない大きさを持つものとして意識されていたことを示す恰好の事象であろう。

その一方で、文化的中央としての畿内にとって東国は飽くまでも地方、辺境でしかありえず、中心対周縁という図式が厳然として成立する事実も否定できない。中央の王権は辺境としての東国に対して政治、経済面では執拗なほどの収奪を繰り返しつつも、文化のレヴェルにおいては排斥し蔑視するしかなかった。否、中心と周縁の理論に従うならば<sup>16)</sup>、文化の表層にあっては排除と蔑視の姿勢に終始するかのようであっても、その基層において何らかの形で東国を包摂し自らの体制の内部に抱え込むことのできる存在でなければ、真の王権を保持、獲得することは不可能に近いと言う方が正確であるのかもしれない。実

のところ、この国の王権にとって、東国との回路は文化のレベルにおいてもつねに確保されねばならぬ性質のものであったように思われる。

勅撰和歌集という制度は、幾内王権の文化的、言語的支配の在り方を示すシステムに他ならないが、後代の勅撰諸集にとって範とされた『古今和歌集』が最終巻の巻二十の末尾に14首の東歌を収載する事実<sup>17)</sup>、『万葉集』の伝統を承継しつつも、中央の王権の言語的、文化的支配力が東国にまで及んでいることを如実に示さんがための処置として解されよう。季節の進行に従って細緻に編成された四季部が時間の秩序化、つまり王権による時間支配の具象化であるとするならば、東歌14首の収録は、歌集の随所に織り込まれた歌枕詠とともに、王権による国土空間支配を形象化するための編集行為として把握することが可能である。東歌の収録それ自体は後世の勅撰和歌集には継承されなかったが、名所概念の確立と名所歌枕詠の盛行は、王朝和歌という制度化された文化の内部において、独自の空間の記号学の体系を組み上げるに至った。歌枕に拠る和歌表現のシステムの詳細に立ち入ることは控えたいが、単に名所歌枕の全国的分布を考えてみた場合でも、畿内五国に次いで東山道諸国、就中陸奥国所在の歌枕が少なからず目につく事実は興味深い。それは、歌枕を通して歌人たちが共有していた文化地理的国土図に占める東国の位置と比重を物語る座標である。極く素朴な物言いが許されるならば、中央の歌人にとって東国は文化的辺境であると同時に一種の異郷＝パラダイスであった。異郷への憧憬が数多の歌枕とそれに付随する説話の成立を促し、歌枕伝説の流布と歌枕詠の多産とが未知の国に対する人々の想いをさらにかきたてる。「歌枕見て参れ」という一条天皇の勅命によって陸奥に左遷され都に還ることなく彼地で没したと語られる藤原実方の伝説<sup>18)</sup>、能因や西行の度重なる陸奥行、歌枕行脚としての芭蕉の『奥の細道』の旅は、そう言った東国憧憬の系譜の上に位置付けられるものであるが、同時にそれらの事象は畿内の文化が辺境である陸奥にまで及び、中央の文化圏が東国をも包摂している事態を示す徴表とも解し得るわけである。

また、いわゆる貴種流離譚において<sup>19)</sup>、有力な貴種の幾人かが東国に足を踏み入れている事実はよく知られている。記紀に語られる倭建命の東征、『伊勢物語』における在原業平の東下り、あるいは藤原実方、源義経といった人々である。彼等は政治的中心の座に据えることを許されず、現実の政治権力からは排除され疎外され続けたが、中心と周縁を往還する一種の文化英雄として、文化論レベルにおける真の王権の主題を担い得る存在であった。彼等の物語に示される東国との密なる接触は、東国の文化論的定位置を試みるに際して無視することのできぬ因数であると思われる。

畿内にとっての東国とは、軍事、経済の両面にわたって豊富な資源を供給し、時には政権そのものの存立をも左右する重要な後背地であると言うにとどまらず、文化制度的にも畿内の王権が中心の位置を維持するために不可欠の装置として機能していた。東山道の西端に位置し畿内山城国と直に接する近江国は、その東国が最も西側に突出した部分として意識されていたのではなからうか。天皇の即位儀礼の一つである大嘗祭の執行に際しては、周知のように悠紀・主基の二国を定め斎田の新穀を献上する制度が存する。悠紀・主基の両国には、畿外の、しかし畿内に比較的近い国々が充てられるのが通例である。主基国には播磨・但馬・美作といった西方の国々が充てられ、平安中期以降は備中・丹波の両

国がほぼ交互に選ばれている。対照的に悠紀国には伊勢・美濃・三河等の東方諸国が充てられるが、仁和四年（888）の宇多天皇の大嘗祭以来、元暦元年（1184）の後鳥羽天皇のそれに至るまで、平安期の各天皇の大嘗祭はすべて近江国を悠紀国に定めている<sup>20)</sup>。地理的、現実的な条件はさて置いて、この事実はまさに天皇の国土支配の在り方における近江国の地位と比重を物語るものではあるまいか。東国の最前線としての近江は、畿内の王権にとってどうしても無視できぬ土地であった。源氏物語における「近江の君」という呼称は、この近江国と背後に控える東国の存在を意識し計算に入れた上で選択されたものではなかったか。そして、その近江の君を愚弄するばかりで自らの懐中に抱くことのできない内大臣は、源氏物語の中で光源氏に付与されている真の王権の主題を終に担い得ない存在であることが暗示されているのではないであろうか。

### III.

源氏物語が東国を舞台とすることはなく、物語の内部で東国についてあからさまに語られることも殆んどない。僅かに浮舟の義父常陸介の人となりに関して、東屋巻で「若うより、さる東国の方の逢かなる世界に埋もれて年経ければにや」云々と筆を費やす程度であろうか。光源氏が流離するの須磨・明石といった西国であって、業平や実方のように東国に赴いたとはされない。しかしながら、光源氏と東国を結ぶ回路は、極めて隠微でおぼろげな形のものではあるが、確かに存在するもののように私には思われる。以下、光源氏と東国との連携に関して若干の検討を加えたい。

一つは、玉鬘十帖の主舞台となる光源氏の大邸宅、六条院の造営である。かつての愛人六条御息所の故地を源氏が伝領し贅を凝らして築き上げたこの六条院は、二町四方に及ぶ広大なもので、その四つの町には紫上・秋好中宮・花散里・明石君といった源氏ゆかりの女性たちが配される。各町はその女主人の好みによって四季それぞれの季節に充てられ、その風情を競い合う。六条院はまさに源氏が担うべき文化的王権の象徴であり、六条院の宰領を通じて源氏という王は女性を支配し、四季の運行を司り時間を支配するのである<sup>21)</sup>。

ところで、中世の『河海抄』以来、この六条院の准拠として、河原左大臣源融が造営した河原院が充てられている。六条京極という所在も等しく、一世の源氏の手になる華美を尽くした大邸宅という点において重なり合う両者であるが、注目すべきは諸書に語られる河原院の庭園のしつらいである。『古今集』<sup>22)</sup>『伊勢物語』八十一段あるいは『今昔物語集』をはじめとする諸説話集<sup>23)</sup>の伝えるところによると、融は河原院内の庭園に陸奥塩釜の景を模し、海水を運び入れて魚貝を養い、また自ら潮焼きの業を楽しんだと言う。融は一世の嵯峨源氏で左大臣にまで昇進するが、政治的実権は藤原氏北家の良房・基経父子に握られ、政治の中枢からは疎外された存在であった。満たされぬその憂悶を慰めるべく、河原院が営まれ風雅に親しんだものと考えられている。しかしながら、『大鏡』の光孝即位の記事が伝えるところによれば、融にも王権の中心に位置する可能性が絶無であったとは言い切れないようである。

（前略）陽成院おりさせ給ふべき陣定に候はせ給ふ。融のおとゞ、左大臣にてやむご

となくて、位につかせ給はん御心ふかくて、「いかゞは。ちかき皇胤をたづねば、融らもはべるは」といひいでたまへるを、このおとゞ（基経）こそ、「皇胤なれど、姓給はりてたゞ人にてつかへて、位につきたる例やある」と申しいで給へれ。さもあることなれど、このおとゞのさだめによりて、小松の帝（光孝天皇）は位につかせ給へるなり<sup>24)</sup>。

（大鏡，太政大臣基経）

融の即位は基経の光孝擁立策によって実現を阻まれたが、融周辺の歌人集団が原『伊勢物語』の成立に関与したとする渡辺実氏の説を射程に入れ<sup>25)</sup>、また『伊勢物語』の初段、いわゆる初冠の段が「みちのくのしのぶもちずり誰ゆゑに乱れそめにし我ならなくに」という融の歌を踏まえて昔人の「いちはやきみやび」の在り方を説く事実を想い併せるならば、河原院の風流が『伊勢物語』の「みやび」に相通じ、融が業平同様文化論レベルにおける王権の主題を担い得る存在であった可能性は否定できない。その融が河原院に陸奥の風景を移構するという形で東国との接触を保っていた事実は意味深長である。

融没後の荒廃した河原院は、周知のように魍魎魍魎の暗躍する怪異の巢窟として平安人士に認識されていたようである<sup>26)</sup>。『今昔物語集』巻二十七第二話は、融の子孫から河原院を譲渡された宇多法皇の前に融の霊が出現した怪異を語る<sup>27)</sup>。『江談抄』<sup>28)</sup>『古事談』<sup>29)</sup>では、宇多に同伴していた京極御息所（藤原時平の女、褒子）に融の霊が取り憑いたとされるが、人口に膾炙した説話であり、古来源氏物語夕顔巻における夕顔急死事件の准拠とされてきた。また『今昔物語集』巻二十七第十七話は、荒廃した河原院に宿った東人の妻が変化の者に吸い殺されてしまった奇談を伝える<sup>30)</sup>。この話も夕顔の頓死と近似した構造を示すが<sup>31)</sup>、東人の宿泊、言い換えるならば東国との接触が河原院内の異界を顕在化させ、物の怪の発動を促すという点において極めて示唆的である。融の生前には陸奥塩釜の景が写し置かれ、融の死後は霊鬼の巢窟と化す。つまり、河原院というのは、平安京内にありながら異界としての東国を抱え込んだ存在なのである。その河原院に六条院が比定され、光源氏自身の有力な准拠として融の名が挙げられている事実は、六条院造営を通して源氏と東国との地下での繋がりが保たれていることを暗示するものではあるまいか。それはまた、源氏が担うべき文化的王権の在り方を照射するもののようにも思われる。あからさまな形での語りは避けつつも、河原院という准拠を介して源氏は東国をも己れの翼下に収め、王として在るべき国土支配の姿を六条院の経営を通じて体現しているのである。

第二に、常陸宮の姫君末摘花との交渉である。ここでは、早く折口信夫によって説かれ、近年鈴木日出男氏がその意義を強調されている「いろごのみ」としての光源氏像を重視して<sup>32)</sup>、考察を進めたい。仁徳や雄略をはじめとする古代の大王たちについて、記紀は屢々多くの女性との交渉を語っている。古代の王にとって、女性と交渉を持ち領有することは、その女性が帰属する氏族集団と土地を己れの支配下に収め、豊穡を体現することに他ならなかった。「いろごのみ」は王が王たるべき必須の条件であり、業平や光源氏の事蹟は彼等がその正統な後継者であることを示している。

末摘花の属性と彼女が源氏物語中に占める位置と機能については既に先人の多角的な考察が積み重ねられているが、小林茂美氏の整理に従いつつそれらを概観するにつけても<sup>33)</sup>、とりわけ末摘花の醜女性を神話学的、民俗学的見地から読み解き光源氏との関わり

を闡明する作業に甚大な意義の認められることは否定できない。醜女としての末摘花の有力な祖型と目されるのは、記紀に出る黄泉醜女と石長姫の伝承である。就中石長姫との比定は極めて説得性に富む<sup>34)</sup>。瓊瓊杵尊の求婚に応じて大山祇神は二人の娘を差し出すが、美しい妹娘木花開耶姫のみが留められ、醜い姉娘石長姫は返されてしまう。長久不変の石との契りを拒んだ天孫の寿命は、花のように移ろいやすく限りあるものとなってしまったと言う。若紫巻と末摘花巻とは時間的に併行し、いわゆる並びの巻とされてきたが、各々の巻の女主人公である紫上と末摘花とが対偶を成していることもまた明らかである。北山の花盛りに見出され（若紫巻）、春の風情を愛し（胡蝶巻等）、「春の曙の間より、おもしろき樺桜の咲き乱れたるを見る心地す」（野分巻）と形容される美しい紫上は木花開耶姫の末裔であり、醜女末摘花は石長姫の系譜に位置する。石長姫は堅固不動の大地の象徴であり、「生成と豊饒の根源力」<sup>35)</sup>を司る地母神でもあった。末摘花巻以後、須磨流離中の空白はあるものの、源氏はこの醜い姫君を心長く庇護し続ける。美女紫上ばかりでなく醜女末摘花との交渉を維持することが、源氏の繁栄を保証していた。「生命の磐石を保証する醜女末摘花は、栄耀への予言達成をめざす光源氏ないし光源氏の物語世界にとっては、不可欠のスケープ・ゴートでもあった」<sup>36)</sup>わけである。

同様の発想において注目されるべき末摘花のもう一つの属性は、常陸宮の姫君というその出自である。父常陸宮は故人として設定されているが、末摘花物語においては光源氏と姫君とを結びつける媒として意識され、構想上相当に重要な役割を果たしているように思われる。末摘花巻では、両者の縁についての源氏の思量が「わがかうて見馴れけるは、故親王のうしろめたしとたぐへおきたまひけむ魂のしるべなめり」と語られ、また蓬生巻では、昼寝の夢に亡き父宮が現われ、夢から醒めた末摘花が「例ならず世づきたまひて」歌を詠じているところに、長らく途絶えていた源氏の来訪が告げられる。末摘花の行末には故人の魂が深く関与しているのであり、その父が常陸宮であったという設定は、没落皇族の官職であるにとどまるものなのか検討が加えられて然るべきであろう。

周知のように、常陸・上総・上野の三国は古来、親王任国とされてきた<sup>37)</sup>。もちろん遙任であり、実際の政務は介が執り行なうのであるが、王権の国土支配ににとってこの三国、ひいては東国がいかに枢要な位置を占める存在であったのかということを端的に示す制度であると言ってよい。中でも東海道の東端に在って「東路の道の果て」とされた常陸国は<sup>38)</sup>、蝦夷の蟠る陸奥国と境を接する「東国経営の前線基地」<sup>39)</sup>として重視された。武神である建御雷神を祀る鹿島神宮の鎮座は、東国鎮定の要衝としての常陸国の地位を物語っている。また東方に拡がる大海原からの日の出を臨むこの国の地理的条件は、日向あるいは伊勢に等しく、『常陸国風土記』が「常世の国」「日高見の国」と称するように、古代人の国土観にあっては聖地としての待遇を受けていたものと考えられている<sup>40)</sup>。親王任国の制は畿内王権の国土支配が東国にまで及んでいる事態を象徴するものであったが、古代的な聖性を色濃く湛える常陸国の宰領の意味はとりわけ重い。その常陸宮の女と交渉を持つということ即ち「いろいろのみ」としての振舞を通して源氏が東国支配の回路を密かに保持することに他ならないという解釈は、牽強付会に過ぎようか。醜女岩長姫の後裔である末摘花は、東国との絆を潜めた女性としても源氏の栄華の持続に不可欠な存在であり、王としての源氏の支配を全きものに行っているのである。

光源氏と東国との接点、その第三は空蟬との交渉である。帯木三帖において伊予介の後妻として紹介されていた空蟬は、関屋巻では常陸介の妻として登場する。関屋巻は、石山寺参詣に赴く源氏一行と東国から京へ帰任する常陸介・空蟬一行との逢坂関における邂逅を描く。その巻頭においてかつての伊予介が常陸介に遷った事実が語られ、赴任、帰任についてそれまでの物語との年次の整合が行なわれるが、この設定は第一義的には逢坂関での両者の再会を導くための物語の構想上の要請に基づくものと解されよう。離京、帰京の年次設定にも破綻はなく<sup>41)</sup>、上国の伊予から大国の常陸の国司に遷ったわけで、官職の現実との対応にも無理はない。しかしながら、末摘花に続いてもう一人常陸国との繋がりを保持する女性（空蟬は夫に従って足かけ六年の春秋を常陸で送っている）が登場することの意義は黙殺できないもののように思われる。夫伊予介の常陸介遷任は、東国との回路を有する女性として空蟬を機能させるためになされた設定でもあったのではないだろうか。

そもそも空蟬については、帯木巻におけるその最初の登場の段階で、既に東国との絆の存在が暗示されていた。

帯木の心を知らで園原の道にあやなくまどひぬるかな（光源氏）

数ならぬ伏屋に生ふる名の憂さのあるにもあらず消ゆる帯木（空蟬）

巻名の由来ともなったこの著名な贈答は、「園原や伏屋に生ふる帯木のありとて行けどあはぬ君かな」という古今六帖歌を踏まえたものであるが<sup>42)</sup>、帯木伝説の地「園原伏屋」は信濃国の歌枕とされているのである<sup>43)</sup>。

さらに注意すべきは、関屋巻での空蟬との再会が、末摘花との再会を語る蓬生巻の直後に据えられている事実である。須磨・明石の流謫を経て政権の中枢に復帰した源氏は、濡標巻での皇位交替に伴って自家の権勢を固めるための方策を矢継早に実現に移し、冷泉帝一光源氏枢軸とでも言うべき体制の基盤を確立することに成功する。同時に、かつて交渉を持っていた女性との再会あるいは後日譚が語られ、いささかの修復、整理を伴いながらも源氏の全円的な女性関係の再構築が試みられる。末摘花及び空蟬との再会も、基本的にはその一環に位置付けられよう。しかしながら、濡標巻の並びとして蓬生・関屋の両巻が連続する展開には、もっと異なった物語の論理が潜んでいるのではあるまいか。稿者としてはそれを、冷泉帝を介して王権の中心に位置することになった源氏に対して、直ちに東国との接触を回復することが要請されるが故の事態であると読み解きたい。まず蓬生巻で常陸宮の姫君との再会が語られるが、末摘花巻に見られた「をこ話」的性格は減退し、ひたすら源氏を待ち設ける姿はいじらしくさえある。再会後の末摘花は源氏の手厚い庇護を受け、その勢力圏に完全に包摂されたかの感がある。次いで関屋巻では、常陸介一行とその妻空蟬との再会が語られる。その邂逅が逢坂でなされていることは、両者の行程が変わる地点として自然な設定であるにしても、そこが京都にとって東国の存在を最も強く意識せざるを得ぬ境の地であるだけに、何とも暗示的である。

そもそも、空蟬との偶会の契機となった源氏の石山寺参詣それ自体が、東国との繋がりを回復する機能を担っていたのではあるまいか。この石山寺参詣が濡標巻に語られる住吉社参詣と対を成す行事であることは明らかである。住吉詣の目的は、須磨浦で暴風雨に遇った源氏が住吉明神の加護を祈念し多くの大願を立てたことの「願はたし」であるとされる<sup>44)</sup>。一方、源氏と石山寺との関わりについてはあからさまには語られないものの、石山

詣の目的については本文中にやはり「御願はたし」と記されている<sup>45)</sup>。平安京外の著名社寺に赴いて神仏の加護を謝し願ほどもきをするという点において、両者は軌を一にしているのである。ところで、大阪湾に臨む住吉神社は元来が海上を支配する神であり、航海安全の神として信仰を集めた。その住吉社に詣でて明神の庇護を仰ぎ帰依を揚言することは、大阪湾から瀬戸内海へと延びる海上交通路を介して王権の支配が西国にまで行き届くことを象徴する行為であると解されないであろうか。逆に、京都への出入を扼する瀬田にほど近い石山寺への参詣は、東国を後背地とする近江国へその足跡を記す行為に他ならない。

平安貴族とりわけ女性の信仰を集めたことで知られる石山寺の創建については、『三宝絵詞』『今昔物語集』『東大寺縁起』等の諸書が次のような説話を伝える<sup>46)</sup>。東大寺の大仏の鑄造に際して塗るべき黄金の不足を憂えた聖武天皇が良弁に祈請を行なわせたところ、近江国志賀郡椿崎の地にある岩上に如意輪観音を造り据えて祈願せよという夢告があった。夢告に従い堂を建て仏を安置して祈願するに、陸奥国より多量の黄金が献上され、大仏の鍍金が叶った。この椿崎の如意輪観音が石山寺の観音であるという。この創建説話において、石山寺は良弁を介して東国との回路を保持する存在として機能し、認識されている。もちろんそこには東大寺の造営に際して多大な資材や労力を供給したとされる近江国の現実的役割も投影されていようが、説話の文脈に従う限り、石山の観音が大仏鑄造という国家信仰体制確立の最終局面において決定的役割を果たしている事実は注意されてよい。王権による国土支配にとって、東国と石山寺ひいては近江とを結ぶ地下水脈の存在は無視できぬ性質のものであったろう。政権復帰後の光源氏の石山寺参詣には東国との絆を回復するという見えざる、しかし王権にとっては重要な主題が秘められていたのではあるまいか。そしてその道中、男女が相会う逢坂関において<sup>47)</sup>東国に縁を持つ女性空蟬と再会し、交渉を再開するのである。

関屋巻以降の空蟬の動静については、玉鬘巻・初音巻の僅か二箇所において語られるばかりで、蓬生巻以後の末摘花に比してもその扱いは軽い。しかしながら、その数少ない出番において空蟬が末摘花と並ぶ形で登場する事実は注目されてよい。末摘花は蓬生巻の末尾で源氏の自邸二条東院に引き取られるが、空蟬については初音巻に至って末摘花とともに「東の院に離れたまへる御方々」として姿を現わし、源氏の庇護を受けていたことが語られる。両者ともついに六条院には迎え取られず、二条東院に住まわせられているのである。それ以前玉鬘巻では、六条院の女主人格である紫上方に依頼して源氏がゆかりある女性たちに正月の衣装を調べて贈る場面において「空蟬の尼君」の名が登場する<sup>48)</sup>。そこでは紫上・明石姫君・花散里・玉鬘・末摘花・明石君・空蟬の順でその衣装が語られるが、『全集』の頭注が指摘する如く「女性たちの記述の順序も彼女らの格付けの順位を示す」<sup>49)</sup>ものであろう。明けて正月、初音巻では元日に源氏が六条院の女性たちのもとを紫上及び明石姫君、花散里及び玉鬘、明石君の順で巡り訪れるさまが語られる。翌二日の臨時客の殷賑を経て源氏は二条東院の末摘花と空蟬のもとを訪問するが、それも「さわがしき日ごろ過ぐして渡りたまへり」という次第であった。その言動が再び戯画化と嘲笑の対象となっている末摘花と、飽くまでもつつましかやかな空蟬の姿とは鮮やかな対照を成しているが、六条院体制の内部には組み込まれないながらも源氏の庇護を受けつつひっそりと暮らしている「御蔭に隠れたる人々」<sup>50)</sup>の代表として、両者の近況が具に紹介されるのである。

元日の女性巡歴と二日の臨時客の盛宴によって六条院体制の栄華と充足を寿いだ源氏が、次いで末摘花と空蟬のもとに足を運ぶさまは暗示的である。源氏王権の象徴である六条院の秩序と繁栄が語られるその一方で、王権が保持せねばならぬ東国との隠れた絆の存在の確認が要請されていると見るのは穿ち過ぎであろうか。逆に、二条東院に留め置かれ終に六条院内部に居処を占め得ぬ事実が、末摘花と空蟬が畿内の王権に対して周縁であり続けるしかない東国に由縁ある女性として配されていることを証し立てているのでもあろう。

もちろん、末摘花と空蟬は純然たる東国出自の女性としては設定されていない<sup>51)</sup>。その意味で、光源氏と彼女等との交渉に、王権の国土支配という面から古代的な「いろいろのみ」の論理を適用し割り切ってしまう処置には批判を免れまいが、隠微な形で見え隠れする源氏と東国との繋りを閑却することもまた難しいように思われる。石山寺参詣、六条院造営も含め、国土支配の象徴的、精神的基層における東国との連携を確保、維持することが、冷泉帝一光源氏体制を確立し、源氏が真の「王権」の主題を担いつつ中心に位置するための必要条件だったのである。

#### IV.

近江の君を東国との回路を保持する存在として読み解くことは、末摘花や空蟬の場合に比してもいっそう自然な作業であるように思われる。彼女を東国由縁の女性とする最も明瞭な刻印は「近江の君」というその呼称自体であるが、極度の古風さと今様との対照はあるものの「をこ者」としての末摘花との同質性も考慮の対象とされるであろう。また、物語の随所に披瀝される彼女の特異な言葉遣いと喋り方についても、東国の影を読み取ることが可能である。「舌疾」<sup>52)</sup>と評される近江の君の早口多弁は、彼女自身が「舌の本性にこそはべらめ」と弁明する如く生来のものとされているが、物語はその由来を「ただいと鄙び、あやしき下人の中に生ひ出でたまへれば、もの言ふさまも知らず」と、彼女の生い育った環境に求めている。杉山英昭氏は「わがままに誇りならひたる乳母の懐にならひたるさまにて」という乳母の影響を重視し、近江の君が乳母から帰化人系の文化を伝承した結果と推察されている<sup>53)</sup>。彼女の出生時にその産屋に居合わせたとされる「妙法寺の別当大徳」との因縁に拠るものだとする近江君自身の発言の存在を考え併せるとき、杉山氏の推定はまことに興味深いものとなる。少なくとも近江の君の言葉遣いの諸相を近江国の風土、文化の在り方と切り離して捉えることは不可能であろう。杉山氏は特記されず、またその実態も不明であるが、『万葉集』巻七に出る「淡海島の物語」との関連も考慮されねばなるまい<sup>54)</sup>。

その舌疾な近江の君の物言いについて、物語はさらに「あはつけき声さまにのたまひ出づる言葉こはごはしく、言葉たみて」と述べ立てる。この記述の背後には

あづまにてやしなはれたる人の子は舌だみてこそ物は言ひけれ

(拾遺集・物名・413 読人不知、輔相集にも)

という引歌のあることが、『河海抄』以来の諸注によって指摘されている。類似した記述が、東屋巻で浮舟の義父常陸介を紹介する一節の中に現われる事実は注意されてよい。

若うより、さる東国の方の遙かなる世界に埋もれて年経ればにや、声などほとほと

うちゆがみぬべく、ものうち言ふすこしたみたるやうにて（後略）。

ここでも「東にて養はれたる人の子は」の拾遺集歌が引歌とされている。この引歌の存在と東屋巻の記事との類同は、その実態が如何なるものであるにせよ、近江の君の言葉遣いが東人のそれと同質のものとして把握されていることを意味する事象ではなからうか。また、彼女の早口に対しては「いとよげにいますこしさへづれば」という言い回しもなされているが、これは「鶏が鳴くあづま」という枕詞表現を想起させ<sup>55)</sup>、近江の君が示す言語的特性にさらに東国のイメージを付与するもののように思われる。近江の君の舌疾さ、特異な言葉遣いには、都人から見た東人の言語的像、東国訛りのイメージに通ずる要素が認められるのではあるまいか。近江の君はその言語的トリックスター像においても東国の影を背負った存在なのである。

近江の君と東国とを繋ぐ絆の存在を最も雄弁かつ赤裸々に露呈するのは、常夏巻の末尾に縷々語られる姉弘徽殿女御宛の近江の君の手紙と歌の贈答である。近江の君は実姉の女御との交誼を求めて、歌枕と引歌を多用した彼女としては凝りに凝った体の歌と手紙を送る。裏書を割愛して引用する。

葦垣のま近きほどにはさぶらひながら、今まで影ふむばかりのしるしもはべらぬは、  
勿来の関をや据ゑさせたまへらむとなん。知らねども、武蔵野と言へばかしこけれど  
も。あなかしこや、あなかしこや。

草わかみひたちの浦のいかが崎いかであひ見んたごの浦波  
大川水の。

手紙の地の文と和歌の双方において、東国の歌枕が濫発されているのはやはり偶然ではないであろう<sup>56)</sup>。ことに「常陸浦」に近江国の歌枕とされる「いかが崎」を続け<sup>57)</sup>、常陸と京・近江を結ぶ東海道の歌枕「田子浦」を配する和歌の構造は、地の文に常陸と陸奥との接点である「勿来関」が引かれている事実とも相俟って、東国の前哨にして枢要の地である常陸国と近江国との緊密な連携と紐帯を暗示するもののように思われる。

そもそも歌の中に地名を詠み込むという行為は、土地の精霊に対する祝言であり国讃めに他ならなかった<sup>58)</sup>。後代の名所歌枕詠にもその記憶は受け継がれているが、歌意の上からも直接的には関連を持たぬ複数の歌枕を支離滅裂に配する近江の君の歌には、そのような地名の象徴性は求めるべくもない。これはまさに物語の本文中に言うところの「本末あはぬ歌」<sup>59)</sup>であり、個々の歌枕が本来担うべき機能——国土空間の秩序化機能は解体を余儀なくされる。「草わかみ」の歌において現出される国土空間は、通常の名所歌枕詠が志向する秩序立ったそれとは様相を異にし、言わば中央による言向けを拒否した混乱に満ち満ちた空間なのであるが、統辞が破綻しているだけに却って常陸に代表される東国と近江を結ぶ地下水脈の存在は隠蔽すべくもないように思われる。近江の君は己れが東国との回路を保持する女性——とりわけ末摘花の後裔であることを、自らの詠歌によって証し立てているのではあるまいか。

近江の君の贈歌に対する弘徽殿女御＝内大臣側の対応は、

ひたちなるするがの海のすまの浦に浪立ち出でよ箱崎の松  
という返歌（実は中納言の君の代作）によって示される。これは、各地の地名を脈絡もなく詠み込むという贈歌の構造をなぞることによって、贈り主の近江の君を徹底的に愚弄す

る意図を秘めた辛辣極まるお返しであると解されている。しかし、歌枕を無秩序に羅列する見かけの表現構造は同一ながらも、この返歌に用いられている地名は贈歌のそれとは異なってすべてが東国に由来するものではない。「常陸」「駿河」と当初は近江の君の贈歌に登場する歌枕「常陸浦」「田子浦」を受けているが、やがて「須磨」「箱崎（筑前国）」と西国の歌枕に横すべりしてしまうのである。歌枕の濫用による混乱した国土空間の現出という点では軌を一にする両者であるが、返歌は贈歌に見られる禍々しいまでの東国の乱舞を受け止めかね、つまりは近江は東国に通ずるといふ贈歌に隠されたメッセージの解釈を果たすことなく、単に意識の表層において相手を愚弄するレヴェルの表現の構築にとどまってしまうのである。この物語の叙述の表層を通じて内大臣家の人々は近江の君を悪辣なまでに嘲弄し、自家の内部に抱え込むことを徹頭徹尾拒否、排斥しようとするのだが、同時に叙述の深層においても近江の君＝東国との回路を保有する女という構造は内大臣側に了解されることなく終始するのである。

玉鬘十帖における内大臣は、六条院の栄華を寿ぐ光源氏に比して終始一貫政治的敗者の立場に立たされ続ける。娘弘徽殿女御の立后は源氏の養女齋宮女御の立后によって実現を阻まれ、東宮の后がねにと目論んだもう一人の娘雲居雁は、源氏の息夕霧との幼な恋が露頭して政治的切札としての価値を失ってしまう<sup>60</sup>。内大臣にとって後宮政策の手駒がなくなったそういう状況下に近江の君は登場する。けれども、六条院体制に自足しつつ末摘花・空蟬をも翼下に収めて東国との安定した絆を維持し続ける源氏に対し、内大臣側は本来ならば物語の象徴的意味合いにおいて東国との紐帯を提供し得るはずの娘近江の君を持って扱いかねて、彼女のトリックスターの跳梁をいたずらに許すばかりである<sup>61</sup>。もちろん粗忽で無教養な近江の君が第三の后がねたるべくもなく、とんだ食わせ者を引き当てた腹いせとばかりに内大臣は一家を挙げて近江の君を嘲弄するが、そのことが逆に一門の体制、ひいては王朝貴族社会そのものの底の浅さを露呈してしまう。実の父娘である以上、内大臣が「いろいろのみ」的に近江の君を領有することは所詮あり得ぬ事態なのであるが、近江＝東国というメッセージを解釈し得ず、近江の君＝東国を抱え込むことのできない内大臣家は、つまるところ冷泉帝－光源氏体制の中枢に参与するべくもなく、光源氏が担う王権の主題とはついに無縁な存在であることを物語の構造は暗黙のうちに証し立てているのではあるまいか。近江の君の登場は権勢家としての内大臣一門の本質を剔抉し、「王権」のあるべき真の所在を暗示する指標としての機能を果たしているのである。

一方の光源氏は、そもそもの出自が東下りを決行する業平の精神的血脈における正嫡であった。行平・道真・高明等の准拠と明石一族物語の展開という物語の構造上の要請に従って彼自身は西国に赴いたが、貴種流離譚自体が中心と周縁との関わりを巡る王権の物語である以上、中心に復帰した源氏にとって周縁の存在の意味はなおさらに重い。帰京後体制固めを行なった源氏が直ちに東国との接触を求める由縁である。近江の君を持って余す内大臣を尻目に、源氏は末摘花、空蟬あるいは明石君にとどまらず、筑紫に生い育った玉鬘をも周縁の女性として自己の勢力圏に包摂しようとする。西国を経由した玉鬘と東国との繋りを秘めた近江の君とは、この点においても明らかな対偶を成す。内大臣方の無慙な失態とは対照的に、養女と愛人の間で揺れ動くという位置のゆらぎはあるものの、玉鬘十帖の前半における源氏は玉鬘＝周縁の女を六条院体制の内部に組み入れることに一応の成功

を収めるのである。行幸巻に語られる玉鬘の裳着は、実父内大臣との対面を可能にし冷泉帝への尚侍出仕を前提とする、換言すれば玉鬘が源氏手中の政治的切札としての役割を最大に発揮した場面である。その直後に近江君が再び登場し、苛立つ内大臣によって、「人の親げなくかたはなりや」と評されるまでに徹底的に嘲弄される事実は、近江の君、内大臣両者の物語に占める位相をこれまで以上に雄弁に物語るもののように思われる。近江の君を抱え込むことのできない内大臣は、光源氏体制に従属する一貴紳の立場にとどまらざるを得ないのである。

推測に推測を重ね、揣摩臆説の羅列に終始した粗笨な見取図であるが、大方の批正を仰ぎたい。

## 注

- 1) 源氏物語の本文は、阿部秋生・秋山 虔・今井源衛校注・訳『源氏物語』一～六（日本古典文学全集、小学館、1970年11月～76年2月）に拠る。以下『全集』と略称する。
- 2) 針本正行「近江の君」（秋山 虔編『源氏物語必携II』所収。学燈社、1982年2月）
- 3) 『全集』第三巻236頁頭注九。
- 4) 『紫式部集』の本文は、南波浩校注『紫式部集 付大式三位集・藤原惟規集』（岩波文庫、1973年10月）に拠る。
- 5) 目加田さくを「近江の君——風土的形成の特殊事情」（同『源氏物語論』所収。笠間書院、1975年）
- 6) 高崎正秀『源氏物語論』（『高崎正秀著作集』第六巻、桜楓社、1971年）
- 7) 杉山英昭「近江女の物語」私考」（『物語研究』第3号、1981年10月）
- 8) 注7前掲論文。
- 9) 長谷川政春『紀貫之論』（有精堂、1984年11月）
- 10) 栗本慎一郎『都市は、発狂する。』（光文社、1983年6月）。栗本慎一郎・笠井 潔『闇の都市、血と交換』（朝日出版社、1985年5月）。高橋昌明『湖の国の中世史』（平凡社、1987年7月）。
- 11) 第十三話（標題略）、第十四話「東国より上る人、鬼に値う語」、第二十話（標題略）、第二十一話「美濃國の紀遠助、女の靈に値ひて、遂に死ぬる語」。
- 12) 第七話「在原業平中將の女、鬼に噉はるる語」、第十五話「産女、南山科に行き、鬼に値ひて逃ぐる語」。
- 13) 阪倉篤義・本田義憲・川端善明校注『今昔物語集』本朝世俗部三（新潮日本古典集成、新潮社、1981年4月）40頁頭注七。
- 14) 「東国」「あづま」の語の意味する範囲は時代や資料によって区々であり、時代が下るとともに現在の関東地方に限定される傾向を示すが、本稿では都の東方に位置する東山道・東海道諸国の総称としての広義の「東国」について、その意味を考えたい。なお、日本史における東国と西国の問題については、網野善彦『東と西の語る日本の歴史』（そしえて、1982年11月）に詳しい。
- 15) 北山茂夫『天武朝』（中央公論社、1978年6月）。同『壬申の内乱』（岩波書店、1978年8月）。
- 16) 中心一周縁理論については、『知の遠近法』（岩波書店、1978年4月）をはじめとする山口昌男の諸論を参照。
- 17) 但し、巻軸の1100番歌は、東歌の標題下に収められてはいるが、藤原敏行作とされる「冬の賀茂祭の歌」＝賀茂臨時祭の神遊歌である。『古今集』全二十巻は、王城鎮護の神である賀茂神社に因む歌をもって締め括られる。なお、この巻軸歌と天皇家との関わりについては、藤平春

男・上野 理・杉谷寿郎『古今和歌集入門』（有斐閣、1978年2月）を参照。巻軸歌を除いた東歌の実数は13首である。

- 18) 『古事談』『十訓抄』『今鏡』『源平盛衰記』等の諸書に、その逸話を伝える。
- 19) 貴種流離譚については折口信夫以来数多の論考があるが、阿部好臣「貴種流離譚の基本構造話型と散文小説への視座」（日本文学協会編『日本文学講座』第五巻所収。大修館書店、1987年6月）の整理が簡明である。
- 20) 本居宣長『玉勝間』巻七「御世御世の大嘗月日悠紀主基国郡」を参照。
- 21) 但し、島内景二『源氏物語の話型学』（ベリかん社、1989年7月）は、四季の町の配置において六条院の構造には歪みが内在することを指摘している。
- 22) 『古今集』巻十六・哀傷歌・852・紀貫之。勅撰集の歌番号は『新編国歌大観』に拠る。
- 23) 『今昔物語集』巻二十四第四十六話、巻二十七第二話、注27後掲諸話等。
- 24) 『大鏡』の本文は、松村博司校注『大鏡』（日本古典文学大系、岩波書店、1960年9月）に拠る。
- 25) 渡辺 実「源融と伊勢物語」（『国語と国文学』第四十九巻第十一号、1972年11月）、同氏校注『伊勢物語』（新潮日本古典集成、新潮社、1976年7月）附説。
- 26) 河原院伝承については、小林茂美「『融源氏の物語』試論」（同『源氏物語論序説』所収、桜楓社、1978年5月）が詳しい。
- 27) 「川原院の融左大臣の霊を宇陀院見給ふ語」。『古本説話集』上巻第二十七話「河原の院の事」前半部、『宇治拾遺物語』第百五十一話「河原院融公霊住事」が同話。
- 28) 『江談抄』巻三「融大臣霊抱寛平法皇御腰事」。『河海抄』にも引かれる。
- 29) 『古事談』巻一第七話「宇多法皇、源融ノ霊ニ御腰ヲ抱カレ給フ事」。
- 30) 「東人、川原院に宿りて妻を取り吸はるる語」。
- 31) 篠原昭二「廃院の怪」（秋山 虔・木村正中・清水好子編『講座源氏物語の世界』第一集所収。有斐閣、1980年9月）。
- 32) 鈴木日出男「天地・鬼神を動かす力——光源氏一面——」（『文学』第五十巻第八号、1982年8月）、同「光源氏の死と再生」（『文学』第五十五巻十号、1987年10月）等の諸論。
- 33) 小林茂美「しこめの物語——神話的幻想の世界から」（秋山 虔・木村正中・清水好子編『講座源氏物語の世界』第二集所収。有斐閣、1980年10月）。
- 34) 鈴木日出男『源氏物語歳時記』（筑摩書房、1989年9月）にも詳説される。
- 35) 注33前掲論文。
- 36) 注33前掲論文。
- 37) 『類聚三代格』に拠れば、天長三年（826）九月、中納言清原夏野の奏上によって定められたという。
- 38) 「東路の道の果てなる常陸帯のかごとばかりもあひ見てしがな」（古今和歌六帖・第五・おび・3360、歌番号は『新編国歌大観』に拠る）。この六帖歌を踏まえた『更級日記』の冒頭はあまりにも著名。
- 39) 注33前掲論文。
- 40) 荒川 紘『古代日本人の宇宙観』（海鳴社、1981年10月）、井上辰雄『常陸国風土記にみる古代』（学生社、1989年8月）。
- 41) 桐壺院の死の翌年（源氏24歳）に常陸に下向。四年の任期を終えたのが源氏帰京の年（源氏28歳）に当たる。その翌年の秋に一行は上京した。
- 42) 『古今六帖』第五・くれどあはず・3019。後に『新古今和歌集』恋一・997・坂上是則、第四句「ありとは見えて」。
- 43) 「信濃なる園原にこそあらねども我がははき木と今はたのまん」（後拾遺集・雑五・1127・平正家）。『能因歌枕』では信濃・山城の両国に掲出、『八雲御抄』は信濃国とする。
- 44) 明石巻（『全集』第二巻261頁）、澤標巻（『全集』第二巻292頁）。

- 45) 関屋巻（『全集』第二巻 349 頁）。
- 46) 『石山寺縁起』『東大寺要録』『扶桑略記』『元亨釈書』等の諸書にも、以下の説話の要約は、概ね『今昔物語集』巻十一第十三話「聖武天皇、はじめて東大寺を造りたる語」に従う。
- 47) 動詞「逢ふ」への連想から、恋歌に多く登場する。例えば「人しれぬ身はいそげども年を経てなど越えがたき逢坂の関」（後撰集・恋三・731・藤原伊尹）。
- 48) 空蟬の出家は既に関屋巻の巻末において語られていた。
- 49) 『全集』第三巻 130 頁頭注。
- 50) 初音巻（『全集』第三巻 151 頁）。
- 51) 本稿では論及できなかったが、浮舟もまた東国に由縁ある女性である。彼女が常陸国に生い育ったと設定されていることの意味は注意されてよい。本稿の論旨に従えば、その浮舟を取り込むことのできなかった薫の世代は、父源氏とは異なって終に王権の主題には無縁な存在であると言うべきであろうか。島内景二注 21 前掲書を参照。
- 52) この語は常夏巻中数箇所に見られ、近江の君の奇矯な喋り口を特性化する。なお、以下の源氏物語の引用は、特記しない限り常夏巻からのものである。
- 53) 杉山英昭注 7 前掲論文。
- 54) 青角髪 依網原 人相鴨 石走 淡海 景 物語為（万葉集・巻七・旋頭歌・1291）。『万葉集』の本文、訓読、歌番号は『新編国歌大観』に拠る。
- 55) 例えば「鶉之鳴 東 国尔 高山者 左波尔雖有（後略）」（万葉集・巻三・385・登筑波岳丹比真人国人作歌一首）。
- 56) 割愛した手紙の裏書には「いでや、いでや、あやしきはみなせ川にを」と、「水無瀬川」が現われる。『源氏積』以来「あしき手をなほよきさまにみなせ川そこのみくづのかずならずとも」という出典未詳歌を引くとされるが、「言に出でて言はぬばかりぞ水無瀬川したに通ひて恋しきものを」（古今集・恋二・607・紀友則）を引歌とする説も存する。「水無瀬川」は元来は水の伏流する川の意の普通名詞とされるが、後年遅くとも新古今時代には山城との国境に近い摂津国の歌枕としての認識が固まったようである。固有名詞化した時期が問題であるが、引歌をも考え併せると、ここは普通名詞的に用いられていると見てよいであろう。参考、奥村恒哉『歌枕』（平凡社、1977 年 4 月）。
- 57) 「いかがが崎」という地名は『能因歌枕』『和歌初学抄』『八雲御抄』の三書がいずれも河内国に挙げ、大阪府枚方市伊加賀の淀川沿岸とする説も存するが、『河海抄』以来『蜻蛉日記』石山詣の記事を引いて近江国とするのに従う。「いかがが崎、山吹の崎などいふところどころ見やりて、葦の中より漕ぎゆく」（蜻蛉日記・中巻）。
- 58) 折口信夫が謂うところの「らいふ・いんできす（生命標）」である。『日本文学の発生 序説』（『折口信夫全集』第七巻）。
- 59) 常夏巻（『全集』第三巻 239 頁）。
- 60) 少女巻。
- 61) 玉鬘十帖に点綴される末摘花の姿は、蓬生巻のそれとは異なって再び「をこ」の要素を強め、源氏を辟易させるが、近江の君に対する内大臣の如き面と向かっての愚弄はなされず、その言動には自己の勢力圏に取り込んだ者の余裕が窺われる。

（平成元年 12 月 22 日受理）